

被連体数量詞句の意味解釈

田中 佑

要 旨

「名詞 + ノ + 数量詞」の語順で構成される日本語の「被連体数量詞句」は他の数量詞(句)とは異なる意味を表したり、他の位置に分布する数量詞が関係を持つことのできないタイプの名詞句とも関係を結んだりする。本稿では、同句の特殊性について、その構成要素の1つである「ノ」に帰属させた説明を試みる。

キーワード

数量詞 コピュラ 連体助詞 内の関係

1 はじめに

日本語の数量詞¹は多様な分布を取る。

- (1) a. 学生の3人がやってきた。 (「N(oun) + ノ + Q(quantifier) + C(ase)」)
b. 3人の学生がやってきた。 (「Q + ノ + N + C」)
c. 学生が3人やってきた。 (「N + C + Q」)
d. 学生3人がやってきた。 (「N + Q + C」)

以下、(1a)を「被連体数量詞句」と呼ぶ。同句は「(学生とそれ以外、例えば教員、から成る集合のうち) 学生の3人」のように文中に明示されない要素を含意したり、他の位置の数量詞とは異なる振る舞いを見せたりする点で特異であるといえる。

- (2) a. 一郎、二郎、三郎の3人がやってきた。
b. *3人の一郎、二郎、三郎がやってきた。
c. *一郎、二郎、三郎が3人やってきた。
d. *一郎、二郎、三郎3人がやってきた。
- (3) a. 屋上の3人がやってきた。
b. *3人の屋上がやってきた。
c. *屋上が3人やってきた。
d. *屋上3人がやってきた。

¹ 本稿の「数量詞」は「数詞+助数詞」で構成されるもののみを指す。

本稿では、被連体数量詞句の特殊性について、その構成要素の 1 つである「ノ」に帰属させた説明を試みる。本稿の主張を簡潔にまとめるなら、以下のようである。

- 被連体数量詞句の「ノ」にはコピュラの連体形と連体助詞の 2 種類がある
- コピュラの連体形を構成要素に持つ被連体数量詞句は基底にコピュラ文を有し、その意味を踏襲する
- 2 種類の「ノ」の区別と被連体数量詞句内の名詞と数量詞のカテゴリーの一致／不一致は対応している

2 先行研究とその問題点

被連体数量詞句について詳細に論じているのは、管見の限り、岩田(2007)のみである。

岩田(2007)は被連体数量詞句を 4 種類に分類している。以下、本稿では(4)を順に「1~4 類」と呼ぶ。

- (4) a. 一郎、二郎、三郎の 3 人がやってきた。(1 類)
- b. 学生の 3 人がやってきた。(2 類)
- c. 屋上の 3 人がやってきた。(3 類)
- d. その学生の 3 人がやってきた。(4 類)

それぞれに関する岩田(2007)の記述は表 1 のようにまとめられる。

表 1 被連体数量詞句に関する岩田(2007)の記述

	例	意味特徴	名詞の種類など
1 類	一郎、二郎、三郎の 3 人がやってきた。	N が Q の内訳	名詞句の羅列
2 類	学生の 3 人がやってきた。	対比的意味、N が Q の属性	不定名詞、N=Q
3 類	屋上の 3 人がやってきた。	—	不定名詞、N≠Q
4 類	その学生の 3 人がやってきた。	Q が N の部分数量	定名詞

※「N=／≠Q」は名詞・数量詞間のカテゴリーの「一致／不一致」を表す

※ 岩田(2007)において 3 類は研究対象外

岩田(2007)は、寺村(1968)で提案された名詞の「実質(実体)性」を測るテストフレームを援用し、「実質(実体)性」を欠く名詞と数量詞は共通の抽象性を持つとした上で、寺村(1975,1977ab)²の分析を引用し、日本語の連体修飾は意味的に「比較的具体的な名詞を底とし他と区別するための修飾」と「比較的抽象的な名詞を底とし内容補充するための修飾」

² 本稿執筆の際は寺村(1993)を参照した。

に区別されるとする。

(5) コ (ソ、ア) レハ——デス。 (寺村(1968:45))

(6) a. これはペンです。

b. これ (こちら) は学生です。

c. ?これはところです。

d. ?これは昨日です。

e. ?これは 3 人です。

f. ?これは 3 個です。

(岩田(2007:93))

そして、1 類と 2 類のみを説明対象とし、上記の連体修飾の意味的区別と関連させ以下のように説明している。

底の要素である数量詞の抽象性により、1 類、2 類の名詞句はともに「内容補充するための修飾」として機能するため、1 類は集合とその内訳のような意味を表す。しかし、2 類の名詞句は数量詞の内容を補充するような情報を持たないため、「他と区別するための修飾」として機能し、それによって対比的な意味が生じる。

しかし、この論には問題がある。

まず、2 類が表す対比的な意味は連体修飾の意味的区別からでは説明できない。

(7) a. 学生の 3 人がやってきた。 (再掲 = (1a))

b. さんまを焼く男

岩田(2007:104)は(7b)を「他と区別するための修飾」の例として挙げる。(7b)は「男」という属性を持つ集合の中から「さんまを焼く」という属性を持つものを限定している。岩田(2007)のいい方でいうなら、「さんまを焼く男」と「さんまを焼いていない男」が対比されていることになる。それに対し、2 類である(7a)は「(学生とそれ以外、例えば教員、から成る集合のうち) 学生の 3 人」のように文中に明示されない要素が含意され、それとの間の対比が表されている。このように両者は同一のものではなく、2 類の意味については異なる説明を与えなくてはならない。

また、岩田(2007)では研究対象外とされている 3 類までを含んだ場合、岩田(2007)の分析では、2 類と 3 類の意味の違いを捉えきれない。

3 被連体数量詞句の意味と「ノ」の関係

本節では、前節で述べた岩田(2007)の問題点を踏まえ、3 類までを含めての考察を試み、1 類と 2 類の「ノ」は日本語におけるコンピュータの連体形であるのに対し、3 類の「ノ」は連体助詞の「ノ」であることを論じる。

本節の構成は、まず 3.1 節にて、「ノ」について西山(2003)を引用する形で導入する。続く 3.2 節では、被連体数量詞句の下位タイプのうち、1 類と 2 類がその基底構造にコピュラ文を有することを指摘し、3.3 節で 3 類の「ノ」のみが連体助詞の「ノ」であり、形式的に類似する 2 類と 3 類の意味の差が基底構造にコピュラ文を有するか否かによって説明できることを指摘する。

なお、4 類については修飾部と被修飾部の主従関係が逆転しており、ここでの分析とは異なるアプローチが必要であると考えられるため、以下の考察の対象からは外す。

3.1 コピュラの連体形の「ノ」と連体助詞の「ノ」

西山(2003)は「名詞句 + ノ + 名詞句」(以下、「NP₁ ノ NP₂」)の「ノ」をコピュラの連体形と連体助詞に分ける³。前者は「NP₁ デアル NP₂」にしか解釈できないもの(=8)を、後者はそれ以外の述部でも解釈できるもの (=9) を指す(例は西山(2003)より引用)。

- (8) a. 北海道出身の俳優
- b. 北海道出身である俳優
- c. *北海道出身で売っている俳優、*北海道出身とされる俳優、…
- (9) a. 太郎のパソコン
- b. *太郎であるパソコン
- c. 太郎が所有しているパソコン、太郎が使用しているパソコン、…

「デアル」でのみ解釈される「ノ」(=8)は活用的一种であり、「NP₁ デアル NP₂」は「NP₁ デアル」という叙述句とそれと格関係を有する NP₂ から成る。つまり、(8ab)は内の関係の連体修飾節構造なのである。したがって、コピュラの連体形の「ノ」を有する「NP₁ ノ NP₂」は次のように「NP₂ ハ NP₁ デアル」というコピュラ文に復元することができる。

- (10) a. 北海道出身である俳優 (=8b))
- b. (その)俳優は北海道出身である。

一方、連体助詞の「ノ」は、助詞であるため、上述のコピュラの連体形としての「ノ」とは異なり、NP₂ と NP₁ の間に叙述関係を形成しない。したがって、(9c)は構造レベルではなく、語用論的に補完された解釈であり、内の構造とは無関係である⁴⁵。

³ 西山(2003)は「NP₁ ノ NP₂」を 5 つのタイプに分けている。コピュラの連体形と連体助詞はそのうちの 2 つを占めるが、残りの 3 つの「ノ」が何なのかについての言及は見られない。本稿も他の「ノ」については立ち入らない。

⁴ 「ノ」と「デアル」の関係に関して西山(2003)とは異なる立場を取るのが奥津(1978)である。奥津(1978)は、原則「ノ」はコピュラの連体形であり、すべての述部の代用形として働くとする。しかし、筆者も、西山(2003)同様、構造レベルと語用論レベルを区別した方が良いと考えるため、奥津(1978)のような立場

3.2 コピュラ文を基底構造に持つ被連体数量詞句

被連体数量詞句において特殊性を示す下位類は 1 類と 2 類である。両者はともに「名詞句 + デアル + 数量詞」という構造を持ち、基底構造としてコピュラ文を有する。しかし、両者は同一のコピュラ文を基底構造に持つわけではなく、1 類は定義文を、2 類は指定文を基底構造に持つ。以下、1 類、2 類の順に確認していく。

3.2.1 定義文を基底構造に持つ被連体数量詞句

被連体数量詞句 1 類の「ノ」は「デアル」でしか解釈できない。つまり、1 類の連体修飾部は「名詞 デアル」という叙述を表す連体節なのである。したがって、これらは内の関係の連体修飾節構造を介してコピュラ文を基底構造に持つといえる。

- (11) a. 一郎、二郎、三郎の3 人 (がやってきた。)
- b. 一郎、二郎、三郎である3 人
- c. 3 人は一郎、二郎、三郎である。

(11c)はコピュラ文の類型の一つの「定義文」と考えられる。西山(2003:176)は定義文について、「A は B だ⁶」において、A は定義される項であり、B は定義する項である」とする。(11c)においても、同様に、数量詞が表す集合は定義される項、名詞句の羅列がその集合を定義する項となる。そして、この基底構造が持つ関係性を表層の被連体数量詞句が踏襲し、名詞が数量詞の内訳を表示しているように解釈されるのである。

さて、この名詞が数量詞の内訳を表示しているような意味は他の数量詞(句)が表すことのできない意味であった。

- (12) a. 一郎、二郎、三郎の 3 人がやってきた。
- b. *3 人の一郎、二郎、三郎がやってきた。
- c. *一郎、二郎、三郎が 3 人やってきた。
- d. *一郎、二郎、三郎 3 人がやってきた。 (再掲=(2))

これは他の数量詞(句)が定義文を基底構造に持たず、名詞句の羅列と上記のような関係性を形成できないからであろう⁷。

は取らない。

⁵ 大島(2003:107)は「「～の」による連体修飾はいわば節による連体修飾の縮約版であり、節の形式にパラフレーズできる」ことから、「意味解釈の上ではすべて連体修飾節に準じて扱うことができる」とする。しかし、これはあくまで意味解釈上のことであるため、構造的には区別しておく必要があると考えられる。

⁶ ここでは「A は B だ」の「ダ」も、「デアル」と同様、コピュラであると考えておく。以下の議論でコピュラ文を表記する際、特に断りなしに「デアル」の代わりに「ダ」を用いる場合がある。

⁷ 母語話者の中には(12d)を許容する者がいる可能性はある。実際、次のような実例も存在する(下線は引

ここで、名詞が成す定義文と数量詞が成す定義文についてもう少し触れておきたい。この2つの定義文は、どちらも言語による「定義」ではあるが、性格が多少異なる。前者は、「AはBである」において、概念Aを条件B(=Aであるために満たさなくてはならない条件)で定義する、いわば「内包的定義文」であるのに対し、後者は集合Aの要素Bを網羅的に示すことで定義する、いわば「外延的定義文」である。田窪(1989:225-226)は、言語記号は「名前」「意味(定義的属性)」「指示対象」で構成されるとする。このように考えるならば、定義される項Aは田窪(1989)のいう言語記号を「名前」としてメタ的に指示していると捉えられる。この観点から二つの定義文の共通点と相違点をまとめると、内包的定義文はメタ的な「名前」を「意味」によって定義する文、外延的定義文はメタ的な「名前」を「指示対象」によって定義する文であるといえる。

3.2.2 指定文を基底構造に持つ被連体数量詞句

被連体数量詞句2類の「ノ」もまた「デアル」でしか解釈できない。したがって、1類同様、内の関係の連体修飾節構造を介してコピュラ文を基底構造に持つといえる。

- (13) a. 学生の3人 (がやってきた。)
 b. 学生である3人
 c. 3人が学生である。

(13c)はコピュラ文の類型の一つの「指定文」と考えられる。これは指定文の「BがAだ」を、意味を変えずに倒置指定文「AはBだ」(=(14b))に、また、その倒置指定文を「AのはBだ」(=(14c))に置換できることから支持される。なお、先に見た、定義文では同様の操作はできない。

- (14) a. 3人が学生である。(=(13c))
 b. 学生は3人である。

用者による)。

- (i) 野田氏の組閣人事について、小沢氏側の評価は「仙谷、枝野、岡田3氏を閣内や党執行部から外したのは、野田さんの我々へのメッセージだ」(側近)と上々だ。 (朝日 2011/09/03)

しかし、このような表現を成立させ得る助数詞には制限がある。

- (ii) *仙谷、枝野、岡田3{名/人}を閣内や党執行部から外した。

つまり、(ii)のような表現は一部の助数詞において固まった表現であり、一般性は高くないのである。

一方、被連体数量詞句1類の場合はそのようなことはなく、どんな助数詞であれ成立する。

- (iii) 仙谷、枝野、岡田の3{氏/名/人}を閣内や党執行部から外した。

したがって、他の数量詞(句)が内訳の意味を表し得ないのは、上述のとおり、定義文を基底構造に持たないためであるといえる。

- c. 学生なのは 3 人である。
- (15) a. 3 人は一郎、二郎、三郎である
- b. *一郎、二郎、三郎は 3 人である
- c. *一郎、二郎、三郎なのは 3 人である。

西山(2003:134-135)によると、指定文(14a)の「ガ」はいわゆる「総記⁸」であり、倒置指定文(14b)の「ハ」も「提題」ではなく「対比」である。したがって、被連体数量詞句 2 類が持つ対比的な読みは、基底構造である指定文(もしくは倒置指定文)の構成要素の一つである「総記」の「ガ」(もしくは「対比」の「ハ」)の意味を踏襲したものとして捉えることができるのである。

3.3 連体助詞の「ノ」と被連体数量詞句

前節で 2 類の対比的な意味がその基底構造である指定文の意味から引き継がれるものがあることを見た。ここでは 2 類と形式的に類似する 3 類を考察する。3 類は 2 類とは異なり、対比的な意味を表さない。

- (16) a. 学生の 3 人 (2 類)
- b. 屋上の 3 人 (3 類)

では、2 類と形式的に類似する 3 類がなぜ対比的な意味を表せないのだろうか。それは 3 類が指定文を基底構造に持たないからである。

- (17) a. 屋上の3 人 (がやってきた。)
- b. *屋上である3 人

(17a)をもっとも自然に解釈するならば(18b)のようになるだろう。

- (18) a. 屋上の3 人 (がやってきた。)
- b. 屋上にいた3 人

しかし、(17a)=(18a))の解釈は(18b)だけではない。コンテキスト次第で様々な解釈が為される。実際、3 類はコンテキストによって様々な意味で解釈され得る。

- (19) a. 屋上の3 人 (がやってきた。)

⁸ 西山(2003:134-135)では「指定」の「ガ」とされる。厳密に言えば、「総記」と「指定」は異なる概念であるが、本稿では、その違いには立ち入らず、広く知られる「総記」を用いておく。

b. 屋上 {にいた／を見張っていた／で寝ている／…} 3 人

(17)(18)(19)は、被連体数量詞句 3 類の「ノ」が連体助詞であることを示している。上述のとおり、連体助詞の「ノ」はあくまで助詞であり、叙述関係を形成し得ない。よって、3 類はコピュラ文の一種である指定文を基底構造に持つことはできず、延いては、対比的な意味を表すこともないのは当然といえるのである。

4 被連体数量詞句の名詞・数量詞のカテゴリーと 2 種類の「ノ」

1 類、2 類、3 類を並べたときに、形式的に類似するのは 2 類と 3 類である。しかし、前節で考察した意味の解釈過程で類似するのは、むしろ 1 類と 2 類である。これはどのように捉えるべきなのだろうか。

被連体数量詞句の各下位タイプの名詞と数量詞のカテゴリーの一致／不一致と「ノ」の種類を見てみると、次のような対応関係があることがわかる。

(20) 被連体数量詞句内の名詞・数量詞のカテゴリー一致／不一致と「ノ」の種類

- a. 1 類：一郎、二郎、三郎の 3 人 N=Q コピュラの連体形
- b. 2 類：学生の 3 人 N=Q コピュラの連体形
- c. 3 類：屋上の 3 人 N≠Q 連体助詞

このような対応関係は、奥津(1983)などで論じられている「数量 Q」と「属性 Q」の区別を思わせるものであるが、本稿では指摘にとどめ、これ以上は立ち入らない。

5 まとめ

以上、本稿では、「名詞 + ノ + 数量詞」の語順で構成される被連体数量詞句の意味解釈について考察した。本稿における議論は表 2 のようにまとめられる。

表 2 本稿のまとめ

	例	「ノ」	特徴
1 類	一郎、二郎、三郎の 3 人がやってきた。	コピュラの連体形	定義文が基底構造
2 類	学生の 3 人がやってきた。	コピュラの連体形	(倒置) 指定文が基底構造
3 類	屋上の 3 人がやってきた。	連体助詞	語用論的解釈に依存

例文出典

朝日：朝日新聞 (聞蔵 II ビジュアル)

参考文献

- 岩田一成 (2007) 「日本語数量詞の諸相 —数量詞の位置と意味の関係を中心に—」大阪大学博士学位請求論文.
- 大島資生 (2003) 「連体修飾の構造」北原保雄編『朝倉日本語講座 5 文法 I』 90-108, 朝倉書店.
- 奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハ ウナギダ」の文法 —ダとノー—』くろしお出版.
- 奥津敬一郎 (1983) 「数量詞移動再考」『人文学報』 160: 1-24, 東京都立大学人文学部.
- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志 (編) 『日本語のモダリティ』211-233, くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1968) 「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』 12:42-57, 日本語教育学会.
- 寺村秀夫 (1975) 「連体修飾のシンタクスと意味 —その 1—」『日本語・日本文化』 4:71-119, 大阪外国語大学留学生別科.
- 寺村秀夫 (1977a) 「連体修飾のシンタクスと意味 —その 2—」『日本語・日本文化』 5:29-78, 大阪外国語大学留学生別科.
- 寺村秀夫 (1977b) 「連体修飾のシンタクスと意味 —その 3—」『日本語・日本文化』 6:1-35, 大阪外国語大学留学生別科.
- 寺村秀夫 (1993) 『寺村秀夫論文集 I —日本語文法編—』くろしお出版.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論 —指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房.
- (田中佑 筑波大学大学院生)

A Semantic Analysis of Numerical Quantifier Clauses that are Modified by Nouns

Yu TANAKA

Numerical quantifier clauses that are modified by nouns, that is clauses that have the word order - noun + *no* particle + quantifier, express a different semantic meaning from other numerical quantifier clauses. Also, they can form syntagmatic relations with nouns which numerical quantifier clauses that appear in a different distributive position cannot. This paper attempts to explain the characteristics of numerical quantifier clauses that are modified by nouns through an analysis of *no* particle which is one of the constituents of this structure.